

2026年1月18日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教68「光のあるうちに」

イザヤ55：6～7、ヨハネ12：27～36

「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。父よ、御名の栄光を現してください」（27～28節）この言葉はイエスさまが十字架におかかりになられる直前にゲツセマネの園で祈られた祈りに通じます。「この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」（マルコ14：36）それゆえこの部分はヨハネ福音書が伝えるゲツセマネの祈りと解釈されます。「この時」とはまさに十字架の時を指しています。十字架から救ってください、助けてくださいと祈りつつ、「しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ」と言われます。恐れと確信が入り混じった複雑な感情を読み取ることができます。十字架の死を目前にしてイエスさまの心が揺れ動いています。これは神さまの独り子としてはいささか情けなく弱々しい姿としてうつるのではないのでしょうか。

しかし、この揺らぎこそ神さまの独り子イエスさまがまことの人となられた何よりのしるしです。ヘブライ人の手紙に「この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです」（4：15）とあります。イエスさまがまことの人としてわたしたちの弱さに同情して下さり、その弱さをここで引き受けておられるのです。その弱さとは十字架という神さまの裁きに耐えることができないわたしたちの弱さです。『ハイデルベルク信仰問答』では、イエスさまが「全人類の罪に対する神の御怒りを体と魂に負われた」（問37）また「わたしの上にかかっていた呪いを御自身の上に取り受けて下さった」（問39）と言います。本来、わたしたちが受けるべき神さまの怒り、呪いをイエスさまはすべて十字架で引き受けて下さいました。それはどんなに恐ろしいことでしょうか。もしそのような裁きを引き受けなければならぬとしたら、わたしたちは耐えられないでしょうし、誰もが逃げ出したいと思います。

わたしたちもしばしば逃れたい、逃げ出したいという思いに駆られます。「この時から救ってください」と祈る時があるでしょう。試練の中、辛い、苦しい思いをして、全部投げ出したくなる。けれどもその重荷に押し潰されそうになっている、そのところにイエスさまがおられることをわたしたちは決して忘れてはなりません。そして「わたしはまさにこの時のために来た」とおっしゃって下さる。あなたのその重荷を背負う、罪の重荷を背負うためにわたしは来た。だからこれからわたしは十字架にかかるのだ。

そのように考えますと、わたしたちが経験する試練や苦しみの意味が変わってくるのではないのでしょうか。ただの苦しみではない。不毛な、何も生み出さない苦しみではなく、その苦しみの中に神さまの恵みを見る、憐れみを知る時となるのです。それはむしろ何事もうまく行っているときにはわからない、見えないものです。例えば、自分が愛されている、受け入れられていることをどこで実感するのか。それは成功しているときではないでしょう。むしろ失敗したり、挫折したり、辛い経験するときに、誰かがそばにいてくれることで知るものだと思います。そういう試練の中で一緒にいてくれる友がいる、家族がいる。そういう助けられる経験こそ愛されていることを実感するときであり、その経験がわたしたちを立ち直らせ、わたしたちもまたそのように誰かの苦しみに寄り添う者とされていくでしょう。

今日のところで注目していただきたいイエスさまの言葉があります。「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう」（32節）続く33節では「イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである」という説明が付されています。地上から上げられるのは、イエスさまの死を意味しているというのです。確かにイエスさまは十字架の上に上げられ殺されました。カルヴァンは、イエスさまが十字架の上で「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれた、そこに陰府があると述べています。イエスさまは、下に向かって死ぬのではなく、上に向かって死ぬのです。それはわたしたちの死の意味を逆転させています。

その上に向かって死ぬ先に何があるのでしょうか。それはよみがえりと昇天という出来事に他なりません。ですから「地上から上げられる」はただ十字架の死だけではなく、十字架の死とその先のよみがえり、昇天へと向かうイエスさまの救いをそこに含んでいます。わたしたちの罪を贖い、神さまとの関係を結んでくださった。それゆえにその死は終わりではなく、天を開く死となりました。『ハイデルベルク信仰問答』でも「わたしたちの死は、自分の罪に対する償いなのではなく、むしろ罪の死滅であり、永遠の命への入口なのです」（問42）と言っています。

人生に起きる苦しみ、試練を驚き怪しんではいけません。それらは起きるに決まっていますが、肝心なことはその苦しみの中に光を見ることです。それをただの苦しみに終わらせないことです。そのためにも信仰が必要です。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい」（35節）「光のあるうちに」とは、原文では「光を持っている間に」です。この光とはイエスさまのことです。イエスさまは「わたしは世の光である」（8：12）と言われました。そのイエスさまが「いましばらく、あなたがたの間にある」と言われます。それはイエスさまの地上の時を指していると理解することができますが、同時にわたしたちがイエスさまに結ばれ信仰に生きる時でもあります。それはイエスさまを礼拝する今この時なのかもしれません。試練を通してわたしたちを信仰へと立ち帰らせる時なのかもしれません。その時を無駄に過ごしてはなりません。パウロも言います。「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」（Ⅱコリント6：2）

アイザック・ウォッツというイギリスの牧師は、たくさんの讃美歌を作りましたが、その中でも「栄えの主イエスの」（297番）は受難の讃美歌でよくうたわれます。「みよ、主のみかしら、み手とみ足より、恵みと悲しみこもごもながる。恵みと悲しみ、一つに溶け合い、いばらはまばゆき、冠と輝く」ウォッツは十字架の中に光を見えています。神さまの愛を見えています。十字架は苦しみの極みですが、しかし恵みと悲しみが溶け合い、そのいばらさえ、まばゆい冠になる。わたしたちもそういう信仰へと招かれています。確かに試練はありますが、その中で神さまの愛を知る、光を見る。今がその時です。

天の父よ。どんな暗闇の中でも信仰によってあなたの光を見させてください。苦しみの中に、試練の中でも、そこにもあなたの十字架の愛を感じ取ることができますように。光のあるうちに、その光を逃さないように、決して暗闇に追いつかれることのないように、闇を振り払い、光のうちに歩むことができますように強め導いてください。主の御名によって祈ります。アーメン。